

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 楊 冠穹

文化大革命(1966-76)以後の現代中国史は鄧小平時代(1980頃-1997)とポスト鄧時代(1997-)とに区分される。鄧(1904-97)は、厳格な統制経済と文化統制とを特色とする毛沢東時代(1949-79頃)を否定し、共産党一党体制は堅持しつつ改革開放による市場経済化を推進して90年代の高度成長を実現した。80年代に生まれ、ポスト鄧時代に作家デビューした世代は「八〇後(ポストエイティーズ)」と称され、その旗手が韓寒(ハン・ハン、かんかん、1982-)である。本論文は韓を軸に、八〇後作家の誕生から、彼らが文化市場に大きな影響を与えるに至るまでを論じている。

第一章は1999-2004年の新人期に、彼が高校生対象の新概念作文コンテストによりデビューし、教育制度批判の小説『三重門』により社会現象を引き起こし、八〇後文学が社会的に認知されたこと、同作と銭鍾書(1910-98)の長編小説『圍城』(1947、邦題:結婚狂詩曲)やサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(1951)との影響関係及びその社会的背景を考察した。第二章は2004-2010年の論争期に、当局側文化界が香港の金庸(1924-)の武侠小説を統一ムード促進のための文化的商品として称揚したのに対し、韓があえて香港の非正統的なコメディ武侠映画とアート武侠映画に学んでパロディ武侠小説『長安乱』(2004)を執筆し、権威的批評家との論争で中国作家協会・主流文芸誌・国营出版社により構成される既成文壇「鉄の三角」を批判した点を論じた。

第三章は改革開放体制下の出版市場の変遷を整理し、八〇後の出版活動と文化権力構造の解体との因果関係を考察した。また2010-2014年の成熟期の韓が、長篇小説『1988～僕はこの世界と話したい』(2010)で異なる時代の記憶の断片を巧みに組み合わせて言論規制を潜り抜け、中国ではタブーとされる天安門事件(1989)の犠牲者への追憶を通じて抹消された歴史を語り、低層民衆の娼婦の物語を付加して、八〇後の主人公の絶望からの回復を描いた点を考察した。第四章は2014年以後を韓の模索期とし、彼が別の八〇後作家の郭敬明(1983-)と前後して映画製作に進出した点に注目し、郭・韓が各種の物語要素を取り入れて映画を製作した点と、八〇後の映画進出が文化市場に影響を与え文学と映像との循環体制を創り出した点を明らかにした。

本論文は韓寒の文学および映画を丁寧に分析し、中国および外国の作品との影響関係を解明する一方、韓寒作品の社会的背景も詳細に論じて、現代中国の「社会主義市場経済」において「魯迅の再来」と称され青年層に幅広く支持される「八〇後」の旗手として韓寒を位置付けるという顕著な成果をあげている。なお小説・映画作品の構造に対する分析不足等の課題を残すものの、本審査委員会はその内容が博士(文学)の学位を授与するに十分な水準に達しているとの結論を得た。